

論文の要約

報告番号	① 乙 医 第1283号	氏名	曾我 朋宏
学位論文題目	Fosaprepitant versus ondansetron for the prevention of postoperative nausea and vomiting in patients who undergo gynecologic abdominal surgery with patient-controlled epidural analgesia: a prospective, randomized, double-blind study		
論文の要約			
<p>内容要旨</p> <p>術後悪心・嘔吐 (Postoperative Nausea and Vomiting: PONV) は全身麻酔を受けた患者の30-50%において発生する。女性、非喫煙者、PONVまたは乗り物酔いの既往、術後オピオイド使用患者はPONVの高リスク患者群であり、PONV発生率は70-80%に及ぶ。また開腹手術後の患者調節型硬膜外鎮痛に用いられるfentanylはオピオイドであり、術後鎮痛効果は高いがPONVの重大な危険因子となる。</p> <p>fosaprepitantはニューロキニン1 (NK1) 受容体拮抗薬であるaprepitantのプロドラッグであり、水溶性で効果時間が長いのが特徴である。これまで制吐薬として広く使用されてきた5-HT3受容体拮抗薬ondansetronに比してaprepitantにはより強力なPONV予防効果があることが示唆されているが、fosaprepitantがPONVに及ぼす影響についてはよく解明されていなかった。そこで、申請者はPONV高リスク患者に対してのfosaprepitant とondansetronのPONV予防効果を検討した。</p> <p>対象は、平成24年6月から平成26年4月までに、徳島大学病院にて硬膜外併用全身麻酔および術後fentanylによる患者調節型硬膜外鎮痛を予定した20-80歳の産婦人科開腹手術患者44名とした。fosaprepitant 150mg投与群 (NK1群24例) およびondansetron 4mg投与群 (ONS群20例) に無作為に割り付けし、PONVの発生の有無、PONVの程度 (score:0-3)、初回嘔吐までの時間、術後痛スコア (Visual Analog Scale:VAS:0-10)、追加鎮痛薬の回数および術後有害事象について、術後0-2時間、0-24時間、0-48時間、0-72時間の期間で評価、比較検討した。</p> <p>結果は以下の如くである。</p> <p>1) 術後72時間までのすべての区間においてPONVの発生率はNK1群とONS群に差を認めなかった。(0-2時間:46% vs. 20%, 0-24時間:71% vs. 55%, 0-48時間:71% vs. 55%, 0-72時間:71% vs. 55%, それぞれNK1 vs. ONS)</p> <p>2) NK1群では術後72時間の嘔吐は0であったが、ONS群では各区間において0-2時間5%, 0-24時間20%, 0-48時間25%, 0-72時間30%の患者で嘔吐を認め、有意に嘔吐の発生率が高かった。</p> <p>3) VASスコアはNK1群とONS群に差を認めなかった。(0-2時間:1(0-3) vs. 2(0-4), 0-24時間:1(0-2) vs. 2(0-3), 0-48時間:2(0-4) vs. 3(0-6), 0-72時間:2(0-5) vs. 3(0-5), [中央値 (四分位数)] それぞれNK1 vs. ONS)</p> <p>4) 追加鎮痛薬の回数はNK1群とONS群に差を認めなかった。(0-2時間:10 vs. 10, 0-24時間:16 vs. 14, 0-48時間:16 vs. 17, 0-72時間:16 vs. 17, それぞれNK1 vs. ONS)</p> <p>以上より、PONVの高リスク患者である患者調節型硬膜外鎮痛を用いた産婦人科腹部手術患者に対して、PONV予防効果はfosaprepitantもondansetronも同様であるが、嘔吐防止効果はfosaprepitantの方が強いことが示唆された。</p>			